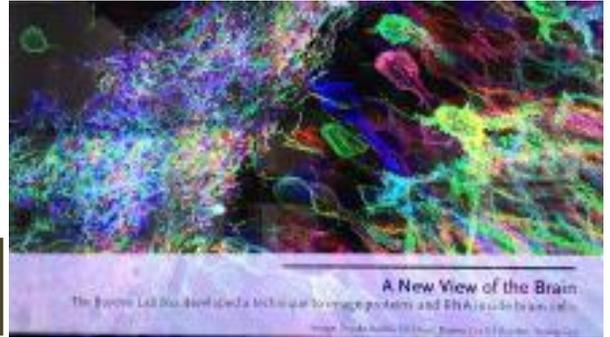


Message from Prof. Kuroda



ケンブリッジ。ボストンからチャールズ川を隔てた対岸にある。5月というのに人々は厚手のコートを纏っている。日暮れにハーバードの校庭を歩くと、学生寮から漏れる灯りに誘われるように、ここで学びたいという思いが湧きあがる。現実には老眼が進み、本を読むのにも数倍の時間がかかるようになったというのに。留年を繰り返しながら生涯ゆっくりと学びたいものだが、そんなことが許されるならキャンパスは老人ホームと化し、だから学則で追い出されることになるのだろう。

翌日はMITメディアラボに行く。地下鉄レッドラインに乗れば、ハーバードスクエア駅からケンドールスクエア駅までほんの15分だが、ふと歩いてみた。しかし予感はずれて、街角に面白いものはない。小一時間も歩くと疲れてしまい、メイン通りとバツサー通りの交差点で立ち止まってしまった。そのときふと目に飛び込んできたのが、ロビーのディスプレイに映し出された神秘的な絵である。McGovern Institute for Brain Research at MITと書いてあるそのビルに入り、柔らかいソファに身体を沈めてスライドショーを眺めていると、A New View of the Brainの次にExpansion Microscopy(膨張顕微鏡法)が現れ、”How do you get a better view of the brain? You either shrink the scientist or expand the tissue.”と問いかける。この研究を主導するEd Boyden教授は、紙おむつの吸収材に使われるポリマーを用いて脳組織を物理的に拡大し、脳の微細構造を見やすくしたのだった。「逆の発想もあるさ！」私はそう叫んでしまう。極小チップを脳に埋め込めば、脳をインターネットに接続できる。だからInternet of Things(IoT)の次はInternet of Brains(IoB)でInternet of Cells(IoC)なのだ。脳や身体に溶け込んだコンピュータは、ヒトの感覚や免疫を拡張し、高齢者の社会生活を支援する。最近そんな夢話を人前でするようになった。

JSTのACCELプロジェクトを始めて2年半が経つ。当初はコンピュータの電力効率の改善がテーマだったが、やがてAIの風が吹き、モバイル人工知能eBrainsとか右脳・左脳と口にするようになった。脳を想うと、コンピュータにも親しみが増す。脳は社会を作り、心を生み出した。人は自分の意図を知り、それを伝えるために言語と論理を獲得した。さらに認知能力を拡張する道具として数学を創った。それはやがて脳に宿り、高度な抽象化によって身体をそぎ落とした果てに、脳から溢れ出した。コンピュータの誕生である。津田一郎が意識の普遍性を「心はすべて数学である」と表現したように、あるいは森田真生が「数学する身体」と表現したように、抽象化の先に産み落とされたのがコンピュータであり、人工知能である。左右の脳を持つeBrainsを創ったら、ヒトの脳と同様に、画像と音声も右脳で認識された後に、左脳の連合野で言葉に抽象化されるのだろうか？マービン・ミンスキーが唱えたように、エージェントの集合は「心の社会」を生み出すのだろうか？言葉の先に意識が生まれ、芸術が生まれ、コンピュータはヒトと同じような変貌を遂げるのだろうか？それとも養老孟司に「バカ」と叱られるのか。

こうした問いかけは面白い。生涯考えてみたい。やはりいつまでもキャンパスに留まることを許して欲しいと願うのだが...